

群 教 ゼ	G09 - 01
	平14.207集

# 英語に親しみ、異文化理解ができる 児童の育成を目指した方法の研究

- 英会話活動計画のテーマを関連させて -

特別研修員 大森 達人 (東村立あずま小学校)

## 《研究の概要》

本研究は、英会話活動計画のテーマを関連させた活動を行い、英語に親しみ、異文化理解ができる児童の育成を目指したものである。まず、日本の文化について遊びを中心に調べ学習を行う。次に、諸外国の文化について遊びを中心に調べ学習を行い、その中で英会話活動を行う。最後に、日本と諸外国の文化の遊びについて、共通点や違いを考え、楽しみながら英会話活動を行い、英語に親しみ、異文化理解ができる児童の育成を図った。  
【キーワード：外国語教育 英会話活動 テーマ 関連 異文化理解】

## 主題設定の理由

近年の世界情勢や社会状況から考えて、子どもを取り巻く環境は、一段と国際化の一途をたどっている。そのため、多くの子どもたちが世界とかがわりをもちながら生きていくことになると思われる。

このような時代に、日本の文化を大切にす気持ちをもつとともに、諸外国の文化や歴史についても理解を深め、自ら進んで人と交わろうとする国際人を目指して、豊かな感性を身に付ける必要があると考える。

今年度より実施している新教育課程における「総合的な学習の時間」では特色ある活動が展開されているが、中でも『国際理解に関する学習』の一環としての外国語会話として、英会話活動を取り上げている小学校が多く見られる。そこでは、英語に慣れ親しみ、英語好きな子どもを育成することを目指し、小さい頃から外国にも目を向けさせるような教育の展開が行われている。

さて、本研究対象児童の中には、「いろいろなことを英語を使って言ってみよう」と感じている児童が多いことが分かった。しかし、小学校段階では、英語の習得を目指し、英語を話せる児童を育成するのではなく、英語を使った楽しい体験的な活動を通して、英語という言語に親しみ、日本文化や諸外国文化に対する異文化理解ができるようにすることが大切であると考える。これまでの英会話活動において、児童は、歌やゲームなどを通して楽しく取り組み、自分の気持ちを身体で表現する喜びを味わう経験をしているが、実際には、その活動内容に系統性がなく、その時間内の活動のみとなってしまう場合が多く、本当に英語に親しみ、異文化理解につながっていたか疑問が残る。そのため、活動内容が盛り込まれた英会話活動計画のテーマの関連性を考える必要があると感じた。

そこで、本研究では、一つの方法として、英会話活動計画のテーマを設定するときの関連性を考えるにあたって、児童が親しみやすく、国の文化を象徴するものとしての「遊び」に焦点を当て、3つの過程を想定した。具体的には、導入の過程において、日本の文化に気づくために、日本の特色を含む「遊び」をテーマに設定し、調べたり発表したりする。また、実践の過程において、外国の文化に気づくために、諸外国の特色を含む「遊び」をテーマに設定し、調べ

たり発表したりする。そして、まとめの過程において、異文化に気づくために、日本と諸外国の特色を含む「遊び」をテーマに設定し、活動を通して比較する。

このような過程をふまえて、国際理解教育の一環としての英会話活動を行うことにより、日本文化と諸外国文化に対する理解が深まり、異文化理解ができると考えた。そこで、本校独自の英会話活動計画を作成するにあたって、各テーマを関連させながら英会話活動計画を作成し、英語に触れる機会を設定すれば、英語に親しみ、異文化理解ができる態度が育つと考え、本主題を設定した。

## 研究のねらい

国際理解教育を目指した英会話活動計画のテーマを設定し、そのテーマの関連性に基づき、実践をすることにより、英語に親しみ、異文化理解ができる児童が育つことを明らかにする。

## 研究の見通し

- 1 導入の過程において、日本の伝統的な遊びを図書館等で調べ、そのすばらしさや特徴を発表し、意見交換することにより、日本の文化に気づくことができるであろう。
- 2 実践の過程において、日本にない諸外国の伝統的な遊びを図書館等で調べ、その特徴を発表し、紹介された遊びを簡単な英語を用いて行うことにより、諸外国の文化に気づくことができるであろう。
- 3 まとめ過程において、今までに紹介された日本と諸外国の遊びの共通点や違いを考え、意見交換をし、遊びを通じた交流活動を簡単な英語を用いて行うことにより、異文化に気づくことができるであろう。

## 研究の内容と方法

### 1 研究の内容

#### (1) 英語に親しみ、異文化理解ができる児童について

英語に親しみ、異文化理解ができる児童とは、英語を母国語としない児童が、学校の実態に応じた英会話活動計画のテーマに基づいて、英語を聞いたり話したりしながら楽しく活動する中で、異なる文化をもつ人のものの見方や考え方にふれ、日本の文化と比較しながらその共通点や違いについて理解していこうとする態度をとらえた。

ここで、本研究における、英語に親しみ、異文化理解ができる児童像とは、以下のような児童である。

- ・ 個人で日本の伝統的な遊びを図書館等で調べ、その特徴をつかみ、グループで発表や意見交換を行う中で、そのすばらしさを感じ取り、日本の文化について気づくことができる児童。
- ・ 個人で日本にない諸外国での伝統的な遊びを図書館等で調べ、その特徴をつかみ、グループで発表や意見交換を行い、紹介された遊びを簡単な英語を用いて行うことにより、諸外国の文化について気づくことができる児童。
- ・ 今までに紹介された日本の遊びと諸外国の遊びの共通点や違いをグループで考え、意見交換を行い、遊びを通じた交流活動を簡単な英語を用いて行うことにより、異文化につい

て気づくことができる児童。

(2) 英会話活動計画のテーマを関連させるということについて

英会話活動計画のテーマを関連させるとは、各過程におけるテーマの内容を遊びに限定し、日本の特色を取り入れたテーマ、諸外国の特色を取り入れたテーマおよび、日本と諸外国の特色を取り入れたテーマの活動が、単発的に終わることなく系統性をもちながら展開していくことである。系統性をもった活動を展開することにより、各文化の共通点や違いが明確になるため、異文化理解をしていく上での有効な方法と考えた。

また、活動中に使用する英語表現については、楽しく活動するために必要とする簡単なものとし、実践の過程で用いた表現をまとめの過程でも用いることが大切である。同じ表現を繰り返しながら無理のない英会話活動ができるからである。

2 研究の方法

(1) 授業実践計画

期 間	平成14年10月下旬～11月下旬	単元名	日本と諸外国の遊びをしよう
対 象	勢多郡東村立あずま小学校 3年1組	男子9名 女子9名	計18名

(2) 抽出児童について

A 男	日本の文化に興味はあるが、諸外国の文化については興味がないため、日本や諸外国での遊びを行うことを通して、異文化理解ができるよう支援したい。
B 女	英語を使って活動することに消極的であるため、諸外国での遊びを皆で行うことを通して、英語に親しみがもてるよう支援したい。

(3) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証方法
見通し 1	「折り紙」や「だるまさんが転んだ」などの日本の伝統的な遊びについて図書館で調べ、そのすばらしさや特徴をグループで発表し、意見交換をすることにより、日本文化に気づけるようになったか。	*観察(活動の様子) *ワークシート
見通し 2	クリケットやバズゲームなどの日本にない諸外国での伝統的な遊びについて図書館で調べ、その特徴をグループで発表し、紹介された遊びを簡単な英語を用いて行うことにより、諸外国文化に気づけるようになったか。	*観察(活動の様子) *ワークシート
見通し 3	今までに紹介された日本と諸外国の遊びの共通点や違いを考え、グループで意見交換をし、遊びを通じた交流活動を簡単な英語を用いて行うことにより、異文化に気づけるようになったか。	*観察(活動の様子) *ワークシート *VTR

研究の展開

1 単元の考察、目標及び目指す児童像

単元の考察	本単元は、小学校3年生における国際理解教育の一環としての英会話活動を取り入れた学習活動である。異文化理解をしていくために、児童が親しみやすい遊びに焦点を当て、その共通点や違いを考え、楽しみながら英会話活動を行うことにより、異文化理解ができると考え、本単元を設定した。
目 標	日本、または諸外国の遊びに焦点を当てた文化について、共通点や違いを考え意見交換を行い、簡単な英会話活動を繰り返し行うことにより、英語に親しみ、異文化理解ができるようになる。
目指す児童像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書館での調べ学習に積極的に参加し、日本文化に気づこうとしている児童。</li> <li>・日本にない諸外国での遊びを積極的に行い、諸外国の文化に気づこうとしている児童。</li> <li>・日本と諸外国における遊びや歌の共通点や違いに気づき、楽しみながら英会話活動に参加しようとしている児童。</li> <li>・発表の段階において、自分の意見や主張をはっきりと伝えようとしている児童。</li> <li>・発表者の意見を取り入れると同時に、自分の考えとも比較しながら異文化について理解しようとしている児童。</li> </ul>

### 3 指導計画 (全11時間計画)

過程	時間	学習活動 【見通し】	支援及び留意点	評価項目
導入	1	・学習の目的や内容を把握する。 ・休み時間等に行っている日本の伝統的な遊びについて考え、列挙する。	・ALTと一緒に活動するとき、日本の文化を、遊びに焦点を当て、行うことを伝える。 ・昼休み等で行っている児童の遊びを示し、その特徴について確認できるようにする。	・図書館での調べ学習を積極的に行おうとしている。
	2	・日本の伝統的な遊びについて図書館で調べ、学級で発表する。  ・紹介された遊びのすばらしい点や特徴について意見交換を行う。【見通し1】	・列挙された遊びについて、その由来や起源について、調べたいものを決めるようにし、図書館で書籍やインターネットを使い、調べた事項を学級内で発表するとき、留意点として、そのすばらしさや特徴について着眼するように意識づける。	・発表段階において、要点をはっきりさせ、準備を行った上で発表を行おうとしている。
	3	・ALTと、日本の遊びについて一緒に活動を行う。	・ジェスチャーを用いて児童が説明を行うが、ALTが理解できない部分については英語で補足説明を行う。	・ALTと楽しそうに遊びの活動を行おうとしている。
実践	4	・ALTによる、祖国における遊びの紹介をしてもらい、一緒に活動を行う。	・難しい英語については、日本語に直すようにする。 ・事前に行う遊びを把握し、使われる道具等を準備しておく。	・仲間はずれにならず、皆と一緒に楽しそうに活動を行おうとしている。
	5	・日本にない諸外国における伝統的な遊びについて図書館で調べる。	・日本にない諸外国の伝統的な遊びについて考える場の設定を行い、自分で調べたいものについて決められるようにする。	・図書館での調べ学習を積極的に行おうとしている。
	6	・調べたものの中で、英語を使って活動を行うものを中心に、まとめを行うとともに、発表練習を行う。【見通し2】	・図書館で、各自調べ学習を進めるが、留意点としては、そのすばらしさや特徴をとらえることとする。 ・遊びを行うときに英語が必要となる場面があるが、そこでの発音の助言をしていく。	・英語を使って表現する時に、楽しそうに取り組もうとしている。
	7	・発表のために必要な、衣装や道具の準備を行う。	・必要な材料等を、事前に調べておき、児童に提供できるようにしておく。 ・製作途中で難しい箇所については、助言を行う。	・自分の役割を明確にし、発表のための準備を一生懸命に行おうとしている。
	8	・発表会に向けての練習を行う。	・紹介する際に、準備した道具等を十分に活用できるようにし、わかりやすいようにする。	・発表練習を一生懸命に行おうとしている。
9	・紹介された遊びのすばらしい点や特徴について意見交換を行う。 ・実際の遊びを行う前に、お互いに英語で簡単なあいさつを行う。【見通し2】	・英語を使って遊びを行う際に、発音や忘れてしまった基本文などを想起できるようにし、不安を取り除く。 ・英語の発音等の間違いは気にせず、遊びを楽しむことが大切であることを伝える。	・英語を使って楽しそうに表現しようとしている。	
まとめ	10	・今までに紹介された遊びについて、日本と諸外国での共通点を見つけだし、意見交換を行う。 ・今までに紹介された遊びについて、日本と諸外国での異なる点について考え、意見交換を行う。【見通し3】	・今までに紹介された遊びについて、日本と諸外国での共通点や違いについて考えを進めていくようにし、意見交換を行っていく中で、日本と諸外国での文化の違いについて、考えをまとめられるようにする。	・日本と諸外国での遊びの共通点や違いを一生懸命に見つけ出そうとしている。
	11	・今までに紹介された遊びをALTと一緒にいき、皆で楽しむ。 ・遊びを楽しんだ後に、お互いに親睦を深めるために、英語で簡単な自己紹介を行う。【見通し3】	・今までに紹介された遊びの中で、自分たちで行ってみたいものを考えられるようにし、実際に楽しむことを伝える。 ・紹介を行う際に、ジェスチャーなどを取り入れて行うことができるよう助言する。	・一生懸命に英語を使いながら遊びを楽しく行おうとしている。

## 研究の結果と考察

1 導入の過程において、「折り紙」や「だるまさんが転んだ」などの日本の伝統的な遊びについて図書館で調べ、そのすばらしさや特徴をグループで発表し、意見交換をすることにより、日本文化に気づけるようになったか

1、2時間目において、ALTが来校した際に、皆で日本の遊びについて紹介を行うことを伝え、自分たちで紹介したい遊びについて詳しく調べ学習を進めた。その中で、大きく4つのグループに分類し、作業を進めた。折り紙、だるまさんが転んだ、お手玉、あやとりについて、遊びの起源や由来、遊び方を図書館で調べ、グループごとに発表を行いながら、意見交換をした。

A男は、日ごろ行っている遊びについて、図書館で調べ学習を進めることができることを喜んでいて、ワークシートによると、「いつもしている遊びをくわしく知りたい。」と書いてあり、その意欲がうかがえた。また、A男はだるまさんが転んだのグループであるが、発表の準備段階でも積極的にグループの意見をまとめ、模造紙に記入していた。発表時には、大きな声で自信に満ちた表情で行っており、ワークシートでは、日本でも地方により言い方が異なることを発見し、次回はその言い方で遊んでみようとする姿を見ることができ、日本の遊びにおいて、地方での特色について違いを実感した様子であった(資料1)。また、意見交換の場においては、他のグループの発表に耳を傾け、真剣に聞き入っており、わからないところについては積極的に質問していた。このことにより、日本の文化にいつそう興味をもったと感じ取ることができた。

資料1 A男のワークシート

調べたこと(遊び方やおもしろさ)  
「くるまのとんてんかん」  
という言い方があった。  
もっといういろいろあったので、  
いろいろ言ってみよう。

B女においては、ALTが来校することを伝えた時に非常に怪訝<sup>けげん</sup>そうな表情を浮かべた。日本語を話すことも十分でないB女にとって、外国の人とのコミュニケーションがどれほど難しいものなのかを想像したためであろうと考える。B女は折り紙のグループに属し、調べ学習を行ったが、自分たちの知らない作品等を探し、一生懸命にその作品を完成させようとして取り組んでいた。ワークシートにおいても、たくさんの折り方があることがわかり、次回にはより多くの作品を完成させ、紹介していこうとする意欲が感じられた。発表の準備を進めるにあたり、様々な作品を完成させ、皆にうれしそうに紹介をしていた(資料2)。また、「お家に帰ってからたくさん作って、みんなにも見せたい。」とも書いてあり、折り紙について今まで以上に興味をもったことの表われと感じた。また、意見交換の場において、他のグループの発表時に、「すてき。私もやってみたい。」ということも言っており、初めて知ったことがうれしく感じ、日本の文化に気づくことのできた場面と感じ取れた。

資料2 B女のワークシート

調べたこと(遊び方やおもしろさ)  
ありがみは、つるやトラヤイ  
オシなどいろいろなおもしろ  
物があります。たくさん作って  
おもしろいものをみんなに  
見せたいと思います。

表1において、学級では、今まで自分達が行ってきた遊びについて、図書館を使い詳しく調べることにより、様々な言い方や遊び方があることがわかり、家族やより多くの人にその遊びを紹介してみようという傾向がわかった。また、それぞれの遊びでの面白さについても多くの児童が他のグループでの発表を聞いたり、意見交換をしていく中で実

表1 児童がとらえた日本の遊びに対する意識(学級)

日本の遊び	他の人に紹介したい	面白さがわかった
折り紙	5人中4人	5人中5人
だるまさんが転んだ	4人中4人	4人中4人
お手玉	4人中2人	4人中3人
あやとり	5人中3人	5人中4人

感じ、日本の伝統的な文化について気づくことができた表われと感じた。

以上のことから、導入の過程において、「折り紙」や「だるまさんが転んだ」などの日本の伝統的な遊びについて図書館で調べ、そのすばらしさや特徴をグループで発表し、意見交換をすることにより、日本文化のよさに気づけるようになったと考える。

2 実践の過程において、クリケットやバズゲームなどの日本にない諸外国での伝統的な遊びについて図書館で調べ、その特徴をグループで発表し、紹介された遊びを簡単な英語を用いて行うことにより、諸外国文化に気づけるようになったか

3、4時間目にALTに紹介をしてもらった遊びについて皆で活動を行った後の5、6時間目の活動として、諸外国における遊びをグループごとに図書館で調べ、遊びの起源や由来について発表会を行った。7時間目は実際に活動を行う際の衣装や道具を作成し、その後の8、9時間目においては、発表した遊びについて簡単な英語を用いて皆で遊ぶ活動を行った。

A男の様子を観察していたところ、最初は諸外国の遊びについて全く興味を示さなかった。ALTが紹介した遊びについても、積極的にやってみようという表情は見られなかった。ワークシートにも、「知らない遊びはつまらなそう。」と書いてあり、図書館での調べ学習に対しても日本の遊びを調べた時と比較すると、口数も少なく、興味を示していなかった。しかし、グループの皆に促されながら調べ学習を進めていくうちに、その遊びに対しルール等の理解の深まりが感じられ、準備も皆から言われなくとも進めるようになってきた。そして、英語を使って表現する場面においては、ジェスチャー等を教師のまねをしながら行うようになった。

資料3のワークシートにおいて、外国での遊びも楽しく行うことができより多くの国を調べ、次回には遊んでみたいと感じていることがわかり、諸外国の文化に対し関心が高まり、そのよさに気づくことができたと考えられる。

資料3 A男のワークシート

【グループでの発表を行った感そう】  
外国での遊びも楽しそうなものもあつた。もっと多くの国の遊びもしてみたい。

B女の様子を観察していたところ、

初めは英語を使うことに非常に抵抗があった。しかし、グループの中で役割分担を行い、B女も英語を話さなければならなくなり、気の進まない様子で練習を行っていた。ワークシートにも、「えいごはむずかしそうじゃべりたくない。」と書いてあったが、英語の歌やチャンツなどを行い、次第に慣れ親しんでいくとともに、活動中の表情も変わってきた。B女が英語を話す場面において、教師側も必ず賞賛を与えるようにし、自信をもてるようにした。最後のワークシートにおいて、遊びの面白さがわかり、英語を話せたことの楽しさについても感じ取り、諸外国の文化に興味をもち始めたことと考えることができ、簡単な英語活動に抵抗がなくなってきたと考えることができる(資料4)。

資料4 B女のワークシート

【英語を使って遊びをした感そう】  
おもしろいあそびがいっぱいあった。  
えいごも話せたのでよかった。

学級全体においては、諸外国の

遊びについて興味をもっている児童は多くいるが、大半は野球やサッカーなどの人気のあるスポーツである。日本にあまり知られていない遊びということに限定したが、諸外国の遊びを直ちに受け入れようとする児童が多くいることがわかった。しかし、実際に調べ学習を行い、英語を使って表現しながら諸外国の遊びを調べたり発表したりするに従い、それらの遊びにも

面白そうなものがたくさんあり、やってみたいという児童が増えてきたことから、諸外国文化について気づくことができるようになってきたと考える。

以上のことから、実践の過程において、クリケットやバズゲームなどの日本にない諸外国での伝統的な遊びについて図書館で調べ、その特徴をグループで発表し、紹介された遊びを簡単な英語を用いて行うことにより、諸外国文化に気づけるようになったと考える。

3 まとめの過程において、今までに紹介された日本と諸外国の遊びの共通点や違いを考え、グループで意見交換をし、遊びを通じた交流活動を簡単な英語を用いて行うことにより、異文化に気づけるようになったか

10 時間目では、日本の遊びと諸外国の遊びを比較しながら、グループでその共通点や違いを考え、ワークシート に記入した後に意見交換を行った。11 時間目では、遊びを通じた交流会を、あいさつや自己紹介を含めた簡単な英語を使って行った。

A 男の様子を観察していたところ、日本の遊びと諸外国の遊びとの共通点や違いを、今までにまとめた資料の中から見つけ出そうと真剣に取り組んでいた。グループでの意見交換の際にも、季節や道具、場所や人数等様々な角度から考え、ワークシート に記入をしていた。中でも、日本では簡単に道具を作ることができ、外国では道具が大変であることがわかった。その視点からも、違いに気づいていると考えられる。さらに、勝負では、勝ち負けの考えは同じであることがわかり、その共通点についても気づくことができたと考えられる(資料5)。そして、簡単な英語を使った交流活動でも、あいさつや自己紹介を行い、ゲーム中に簡単な英語表現を用いたことは、楽しさを増すための要因として大切であることを実感できたものと考えられる(資料6)。

資料5 A男のワークシート

日本の遊びと外国の遊びの共通点	人数	日本の遊びと外国の遊びのちがいは
同じく少くとも遊べる。		日本は少ないものが多い。
ゲーム中にも遊べる。	場所	外国は広いものが多い。
つくることができる。	道具	日本はかんたんだけと外国はむずかしい。
一年中できる。	季節	外国は大きな音をたしてやるものが多い。
何でもいいものもユニフォームもある。	衣装	外国はユニフォームが多い。
かちまけがある。	その他	外国は小さいときから大きくなるまでできるものが多い。

資料6 交流活動で使われた英語

B 女: Hello. My name is ~~~. What's your name?
C 男: My name is ~~~. Nicetomeetyou
B 女: Nicetomeetyou, too.

B 女においては、ワークシート への記入も順番に従って行っていたが、一人でまとめることは難しかった。グループでのまとめを行う段階で、皆からの意見を参考に記入していく中で、一人で小さくうなずきながら進めていく場面が見られた。このことから、日本の遊びと諸外国の遊びとの共通点や違いを、グループで話し合いを行う中で、見つけ出すことができたと考えられる。英語を使った交流活動でも、自分の英語が相手に伝わったことを実感しながら楽しそうに行っている様子がうかがえた。ワークシート の中で、「えいごも日本ごも同じに、かんたんだった。」と書いてあり、英語を使った活動に対して、意欲的な姿勢がうかがえた。

学級全体においては、主に自分たちで調べた遊びを比較しながら意見交換を交わしてきた。各項目において、全児童が、共通点や違いに気づくことができ、考えを広めることができた(表2)。そして、簡単な英語を使った活動に関しても、「楽しかった。」「かっこよかった。」「また使

表2 ワークシート における異文化への気づき(学級)

観点	遊びの違いが発見できた	遊びの共通点が発見できた
人数	18人中15人	18人中14人
場所	18人中11人	18人中18人
道具	18人中18人	18人中9人
季節	18人中10人	18人中9人
衣装	18人中18人	18人中10人

いたい。」、「もっといろいろ言いたい。」と多くの児童が書いており、英語を使った活動に対する意欲の高まりを感じることができた。

以上のことから、まとめの過程において、今までに紹介された日本と諸外国の遊びの共通点や違いを考え、グループで意見交換をし、遊びを通じた交流活動を簡単な英語を用いて行うことにより、異文化に気づけるようになったと考える。

#### 研究のまとめと今後の課題

日本と諸外国の伝統的な遊びを取り上げ、そのすばらしさや特徴を考え、共通点や違いについて発表や意見交換を行い、簡単な英会話活動を取り入れながら行ったことは、児童が英語に親しみ、異文化理解をしていく上で有効であった。

英会話活動計画を遊びというテーマに設定し、関連させながら活動を行ったことは、児童が次時への意欲をもちながら活動を進めることができ、有効な方法であった。

英会話年間活動計画の作成に当たり、遊びを中心とした活動を考えたが、年間を通して活動をする場合、遊び以外の他のテーマについても関連性を考えていく必要があると感じた。

#### <参考文献>

- ・加藤 幸次、浅沼 茂 編著 『国際理解教育をめざした総合学習』 黎明書房（1999）
- ・吉村 峰子、グローブ インターナショナル ティーチーズサークル 編著  
『英語で国際理解教育』 小学館（2001）